民生文教委員会

10月3日～5日にかけて、東京都大田区・茨城県常陸太田市・東海村・鉾田市の視察研修を行った。

大田区にある佐伯栄養専門学校とは、本市とゆかりのある佐伯矩博士が創立した世界初の栄養士専門学校である。

当日は、食育祭が開催されており、食の重要性を地域に、そして、全国に発信している重要なイベントで、今後、伊予市が「食育」や「食のまちづくり」を積極的に推進していく上で、重要なキーポイントになると強く確信した。

常陸太田市では、幼保合同施設として建設された「こどもセンターうぐいす」を視察した。当初は、幼稚園と保育所がそれぞれ別々にクラス編成をしていたが、少子化による人数の減少により、様々な課題が生じた。そこで、幼保一体的運営特区の許可を受け、幼稚園児と保育園児の合同クラスを編成した。効果として、幼児期から多くの人と接し、社会性や創造性を育む機会を提供できる。また、保護者の子育てへの不安解消に努めるとともに、保護者が利用しやすい制度として、保育環境が整備できていた。

東海村では、総合福祉センター「絆」を視察した。

この施設は福祉と保健との一元化・総合サービスを提供する拠点として、5つの機能を集約し建設された①地域福祉センター②高齢者センター③障害者センター④児童センター⑤保健センターがある。

また、運営を円滑にするために、利用者の代表者等で運営する協議会を開催し、問題点などを協議し、村民が利用しやすい施設を目指していた。

鉾田市では、市民の健康増進・交流ゾーンとして位置づけされている「とっぷ・さんて大洋」を視察した。

平成4年にオープンし、当時は、「高齢者に筋肉トレーニングを推奨することで医療費を抑えた」として話題となり、多くのマスコミにも取り上げられた。

敷地面積2万9720平方メートルで温水プール、温泉施設、トレーニングルーム、健康相談室、レストラン、コテージ、陶芸小屋、クロッケー場などがあり、市民の憩いの場として定着していた。

今回の行政視察が、今後、建設予定の総合保健福祉センター等の取り組みに積極的に生かしたいと委員一同誓い合い、行政報告としたい。

こどもセンターうぐいす

産業建設委員会

10月4日～6日にかけて、新潟県新発田市・見附市の視察研修を行った。

新発田市での食の循環によるまちづくりの視察では、市民、事業者及び市が毎日の暮らしの中で「食」の大切さを認識し、「食」の循環におけるそれぞれの役割を理解し合い、行動することで「食」の循環を活用したまちづくりを進め、健康で心豊かな人材の育成、産業の発展、環境との調和、まちのにぎわい等の「地域の活性化」と「市民生活の向上」を目指していた。地産地消だけでなく『地消地産』という表現を用いて、消費者に求められる農産物を土づくりからこだわり、消費者目線に立った農業を推進している。

特に有機資源センターは、ごみの原料化と良質な堆肥づくりを同時に行う資源循環型社会づくりの根幹施設に位置づけ、赤字ではあるが約6750トンの特殊肥料と約2250トンの普通肥料を生産し、農家や小中学校、公共施設の花壇などに利用している。

学校給食への地場産業食材納入ルートの拡大、農産物を直接調理場へ搬入し、学校給食の米飯には、すべて新発田産コシヒカリを使用している。

見附市の豪雨災害の復興の取組については、2004年7月13日の豪雨では、刈谷田川の決壊、市街地の浸水、土砂災害、農地・農業施設、農作物被害が甚大で、後に激甚災害に指定された。

刈谷田川の改良復旧は、7年間で約580億円を投じ、工事は最終段階に入っていた。刈谷田川の流水断面を補完するため、全国的にも珍しい大規模な遊水池を6カ所創設している。農林関係では3年間で約13億円、土木施設で約2億円を投じ完了している。

また、2004年10月23日の最大震度7の中越地震では、見附市でも震度5強を観測し、古い家屋を中心に多くの被害が発生し、市街地は液状化現象で道路は田んぼのようになり、陥没や崩壊が多数発生、直ちに避難所を開設し、給水やガスカセットコンロ、ボンベや物資の提供を迅速に行ったそうである。

市は一番に人命第一を考え、応急復旧とし、職員が各地域で対応したが、市内全域であるので、現地確認や避難作業に人手が足りなく大変であったと聞かされた。今後予想される南海地震の対応に大変勉強になったことを報告としたい。

見附市での研修